

高齢・障がい者の目、耳、口となる

旭川市 NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所

高齢者や障がい者に対する社会の理解や支援は時代とともに徐々に充実してきているが、いまだ十分とは言い切れない。なかでも最も求められながら非常に不足しているのが、外に出て人生をエンジョイしようとする際の情報。レストランに行きたいが受け入れてくれるだろうか、ホテルに泊まるにはどうしたらいいか、旅行を楽しみたいが車いすでも大丈夫だろうか……。一般の人ならば何の苦労もなしに知ることができる事柄の一つひとつが、ハンデを持つ人たちにとっては大きな難事なのだ。



ここは障がい者にとって安全、安心な所か—当事者目線で安全の確認をするチーム紅蓮のスタッフ

そこでこうした人たちの目や耳、時には口、足になって求めているものを探し、受け入れ状況を調べ交渉して、安心して出かけられるよう情報を提供するのがNPO法人「カムイ大雪バリアフリー研究所」だ。スタッフの大半も、車いす使用など何らかの障がいを持つ人たちなので、一般の人が気が付かないきめ

細かな対応ができ、しかも同じ手助けをする団体が全国ネットでつながっているため広範囲の対応も可能である。障がいがあるばかりにこれまで家に閉じこもりがちだった人たちも、これを利用することによって一挙に自分の望む“未知の世界”を体験することができるようになり、外遊びや旅行を楽しみたいと思っていた“潜在的な行動派の高齢・障がい者”にとって一大福音となっている。

■ 障がい者スポーツの

合宿対応がきっかけ

今のきっかけとなったのは2005年（平成17年）冬、旭川で、冬のパラリンピック（身障者のオリンピック）のアイススレッジホッケー（下半身に障がいがある人が、底にスケートのついた特殊なソリに乗ってパックを相手ゴールに入れることを競う氷上競技）の日本代表選手の強化合宿が行われたのがはじまり。

当時旭川には、障がい者を団体で受け入れるノウハウもなく、デザイン設計会社を営んでいた関係で、障がい者の知り合いが多かった現研究所会長・理事の只石幸夫さん（60）たちが中心になって対応した。とはいえこんなに多くの障がい者アスリートの受け入れは初体験。それでも選手のために、また旭川のメンツにかけても満足のいく合宿をさせてあげたいと手分けして市や商工会議所、観光協

会、ホテルや飲食店など精力的にかけずり回り、何とか合宿実現にこぎつけた。だが実際に合宿を始めてみると階段の段差、移動時の不便、食事の対応など、気付かない不具合が次々と出てきた。苦慮していた時に知り合ったのが、ちょうど事務研修生としての仕事を終えてフリーとなっていた車いすの障がい者、現研究所バリアフリーツアーセンター長・五十嵐真幸さん(27)。

五十嵐さんは地元出身で、旭川の雪や厳しい寒さの中、車いすでの冬道の移動などもお手のもの。何よりもそれまでの経験から、当事者目線で障がい者に接することができる強みを持っている。只石さんたちの苦衷を察すると直ちに協力を申し出た。

五十嵐さんの仕事は車いす2台・2人と介護者1人の計3人が一組で行うのが常態。只石さんたちはこの協力者に「車いす^{ぐれんたい}紅蓮隊」と名付け、障がい当事者でなければできない仕事をまかせた。事業名を「障がい当事者がプロデュースする雪と氷の世界」とし、内外の障がい者に対し雪の中でどんなおもてなしができるかを研究しながら、真心で合宿中の選手を全面支援した。この甲斐あって旭川合宿は大成功。その冬開かれたトリノパラリンピックでの活躍に結実し選手や関係者一同から「お陰様で。ありがとう」の感謝の声が寄せられた。

■ 経験を積み重ねNPOを立ち上げ

この活動を通じて痛感されたのが、今の社会が、まちに出て人生を充実させたいと望んでいる高齢者や障がい者にとっていかに不便、不自由かということ。合宿を進める課程で何

が不足で、何が必要か、どうすれば温かいおもてなしが出来るかなどは十分に学んだ。福祉関係の団体や旭川医大、旅行、ホテル、飲食店、障がい者スポーツ団体などとのつながりもできた。これらの情報を、求めている障がい者らに日常的に提供して、大いにまちに出て人生をエンジョイしてもらおう。こうして「カムイ大雪バリアフリーツアーセンター」の礎は、多くの協力団体を巻き込んで2010年(平成22年)誕生した。合宿修了後、4年経っていた。カムイはアイヌ語で「神」、大雪は旭川のシンボル、共に快適さを実現できるよう求め続けるという意味でつけた。



この1本が地球を救うと、懸命にスコップを振るう車いすの面々

障がい者スポーツ選手の合宿受け入れで、何が求められているかを知ったので、活動は最初から活発でスピーディー。国の障害者自立就労支援事業の指定を受け、ホテル、飲食店、公共施設などの受け入れ体制の調査研究やそのデータ蓄積をメインに、植樹や農業実習する水・美土里事業、デザイン・プリント事業、家具・調度、家屋の傷や汚れを修復・復元する事業、パソコン入力やホームページの制作、画像編集の実践とそれらの技術を講習するICT事業の5つを実施。ほかに無料のサービスとして高齢・障がい者に旅の情報

をきめ細かく提供する事業や、障がい者でもできるニュースポーツの創造と参加への呼びかけ、ハンデを持つ人たちが安心、安全に観光を楽しめるためのバリアフリー観光の推進など、一人ひとりがバリアフリー観光関連事業の就労ノウハウ蓄積に向けて多角的に取り組んでいる。これら有料、無料の事業を実際に手がけ、提供する中核を担っているのが、障がい者スポーツ団体の旭川合宿を支えた五十嵐センター長をリーダーとする「車いす紅蓮隊」。現在は同じ目的で地域内外のたくさんの仲間が集う「チーム・紅蓮ぐれん」に進展している。



五十嵐さんから身障スタッフの手によってプリント制作されたTシャツ、トレーナーの数々。オーダーによってオリジナルの作品が次々に誕生。天井にはチーム紅蓮の旗も

■ やりたいことを次々に実現

目見張る行動力

現在研究所の直接スタッフは、只石会長をはじめ「チーム・紅蓮」を中心に車いすの人数人とその介護者、障がい者ら 15 人ほど。行う事業によって他の会員や協力団体に協力を求める。

驚くのはその行動力と行動の範囲の広さ。例えばある障がい者から〇〇ホテルに行き、△△レストランで食事をしたいのだが…とい

う相談があったとする。すると直ちに、車いすのスタッフが車で現地に出向き、受け入れ可能か、玄関や階段はバリアフリーになっているか、トイレは障がい者仕様か、料金はいくらかなどを障がい者目線で細かく調査。もしハードにバリアがあるなら、ソフト的な工夫で対応して受け入れてもらえるかなどを打ち合わせ、現地までの交通手段なども合わせて相談者へ回答する。対応範囲は今のところ旭川中心の上川管内が主だが、札幌、函館、釧路、帯広など北海道全般についても情報を取り寄せて応えている。それらのデータはすべてパソコンに蓄積され、依頼に応じて可能な限り直ぐ取り出せるようになっている。急ぐ仕事がない時は手分けして各地に行き、実地調査してデータを溜め、目下のところその数は数百件にのぼっており、これからも増やす意向。

また、ここの強みは福島、東京、金沢、伊勢、広島、松江、愛媛、佐賀、沖縄など全国 16 地区にあるバリアフリースターセンターとネットワークでつながっていることで、そこの情報のやり取りで全国の主なところの受け入れ状況が居ながらにして入手できることだ。現にこれまでに研究所に問い合わせが年間 200 件前後上がっている。本州各地からの要望、問い合わせは雪や冬に関するものが圧倒的に多く、これが旭川の“売り”になっている。

一方、人生を楽しむイベントへの高齢・障がい者のいざないや主催事業も極めて活発で、中でも力を入れているのが祭りへの参加。旭川最大の夏祭り「旭川さんろく祭り」には、研究所発足当初から車いすの集団で加わり、

翌年には独自に露店も出すほどの熱の入れよう。2年後にはこの意気込みに感動した当時の観光協会長から「みんなで神輿を担いでみませんか」と、保存してあった神輿一体の使用をまかされた。



セイヤ、サー、セイヤ、サー。車いすで一緒に神輿を担ぎ全身で祭りを楽しむ障がい者の人たち

そのままでは車いすで担ぐのは無理なので、どうしたら担ぐことができるかをスタッフ全員で智恵を絞り、揺れる特殊な台車をもつ御輿に改造、それをみんなで担いでセイヤ、サー、セイヤ、サー。これには北海道内外からも車いすでの参加者が大勢集まり、今ではさんろく祭りの名物神輿に。神輿担ぎは沖縄から参加した障がい者の共感を呼び、「ぜひ貸してほしい」と懇願され、これまで3回、沖縄・那覇に海を渡り、南国の地で障がい者らを楽しませた。仕掛け人の五十嵐さんらは「車いすの人たちは祭りといえば“人の尻”ばかりしか見えなかった（目線が低いので祭り参加者の下半身しか見えなかった）が、これで我々もみんなと対等に楽しめるようになった」と笑い飛ばす。

このほか車いす野球やフロアスレッジホッケー、パークゴルフ、カーリングなどのスポーツ、雪と氷の祭典参加や牧場見学、森づくりなどの活動、さらには乗馬や犬ぞり搭乗体

験等々、これまでハンデを持っていた人たちは到底無理と思われていた楽しみを次々に実現させており、全道、全国の障がい者や福祉団体の注目を集めている。

何といても研究所の特徴的なことは、若い車いすスタッフたち自らが“したい”と思ったことを積極果敢に実践体験し、実現させ、みんなを巻き込んでゆく行動力。これについて五十嵐さんは「自分たちの役目は困りごとや望むことを聞いてバリアの取扱い方をアドバイスしてあげられること。だから、一緒に取り組み、願いが叶えられた時はとても嬉しい。もっとたくさんの人たちにもセンターを知ってもらい、相談が寄せられ解決されることを望んでいます」と意気軒昂。また会長の只石さんは「我々の実践や仲介で多くの高齢者や障がいのある人たちが人生をエンジョイし、ふれ合いの輪が広がればこの上もない喜び。今のところこうした組織は旭川しかない。札幌はじめ、もっと全道的に広がり、より多くの人たちに社会参加の喜びを味わってもらえれば嬉しい」と語っている。

■ 連絡先

〒078-8368 旭川市東旭川町旭正 315-2

NPO法人カムイバリアフリー研究所

代表 只石 幸夫

センター長 五十嵐 真幸

TEL:0166-38-8200/FAX:0166-38-8200

Email:kamuitad@sc-kamui.co.jp

URL: <http://kamui-daisetsu.org/>